SAPIX 2026

『ふしぎなフーセンガム』大賞

「らしくない」って誰がきめるの？

2年　A・Mさん

「それって男の子の色じゃない？」

年長のころ、クラスの友達に言われた言葉です。私は、女の子らしい色やキャラクターよりも、男の子に人気のあるものが好きでした。そのときは平気なふりをしていましたが、心のどこかに引っかかりが残りました。

この本を読んで感じたのは、「その人らしさは、だれかに決められるものではない」ということです。主人公のじゅん君は、男の子だけれど、外で遊ぶより指あみや読書が好きです。その姿を見て、私は自分と重なる部分があると思いました。

「男の子なんだから」「女の子なのに」。そんな何気ない言葉に悪気はないのかもしれません。でも、言われた側は「自分の好きなものは変なのかな」と、居心地の悪さを感じます。好きなことに性別は関係ないはずなのに、「こうあるべき」という見えない枠に入れられているような気分になります。

じゅん君が女の子に変身したかったのは、誰の目も気にせず、好きなことを思いきり楽しみたかったからではないでしょうか。変身したじゅん君の笑顔を想像すると、私までうれしくなりました。

さらに心に残ったのは、じゅん君も、やまんばみこさんを「女の子らしくない」と決めつけていたことです。しかし、一緒に過ごす中で、それまで見えていなかった優しさに気づきます。その場面を読んで、私も知らないうちに誰かを「らしくない」と決めつけていたかもしれない、とはっとしました。

自分らしさは、自分で決めたい。周りの人の「その人らしさ」も大切にしたい。「みんなと違うこと」は悪い事ではありません。これから友達が「らしくない」と言われていたら、「好きなものは人それぞれだよ」と伝えられる人になりたいです。それが、この本が私にくれた一番大切な贈り物だと思います。